

蘇芳集



螢 草

高橋 さえ子

はつふゆと

青山

丈

螢草水の面は星をふやしけり
張り替への琴の緒かたし初月夜
試歩つづく緋衣草の色激し
開店の花屋に寄りて冬浅し
石壁の影が真赤ぞ冬没日
髪切つて縞ふくろふに啼かれけり
みづうみの帆船十二月八日

十月に咲く柊を笑ひけり
食べ過ぎぬやうにと剥いて衣被
はつふゆとその日の内に言ひたくて
敗荷へ次次とある水溜り
二の酉に橋爪功のやうな人
冬日粲粲コンビニの週刊誌
正確に八ツ手の花を数へけり

冬の鴝

八木下 末黒

先 生

小川 美知子

朔日の十一月の日向かな
茶の花やぼつりぼつりと独り言
戦前の二軒長屋の花八つ手
師の逝きし後の空白枇杷の花
枇杷の花常磐線に突当る
しぐれ忌や夕餉につかふ皿小鉢
冬の鴝しつかり奥歯治すかな

悼みのことば

吉田 幸敏

ととのはぬ悼みのことば枯深し
枯山へ師を恋ふ声を置いて来し
中陰や比翼墓より冬の蝶
師かもしれぬ波止の深紅のオーバーは
冬かもめ知己のごとくに舞ひくれし
赤い靴の少女十指を組めば冬
明日は大雪師を偲ぶ会果てて

味噌溶いてそこはかとなく冬立てり
ひとひらの冬日が床に落ちてゐる
水鳥を夕べ見にゆく坂がかり
さざ波の昏むと見れば鳩出づる
どこを曲がつても十一月の街
先生の声がたしかに冬椿
先生に冬日の椅子を空けておく

落葉どき

金田 きみ子

晩年の日々逃げ易く木の葉髪
椅子の端に日射しのとどく落葉どき
枇杷咲いて寺領のなかの診療所
冬日濃し水子仏なる頬赤く
小春日和ひとりの昼のやはらかく
人来るは嬉しあかあか寒椿
寒晴やパン屋の車人囲ひ

柿むけば

上林孝子

振子時計

小島みつ如

居待月正座出来なくなりて久し
同齡の樹ならむ紅葉いつせいに
背の君と再会ありや秋好日
午後の日のかげり早くて花八ッ手
小鳥来る遺品の中に鍵の束
崖の葛身も世もあらずなだれ咲く
柿むけば今日も独りの夜が来る

師を送る

木内憲子

水引や水面に風の息走り
師を思ふところに秋の泉かな
幾たびかさやけしと言ひ師を送る
人ごゑの恋しき雑木紅葉かな
読み書きの果ては淋しく秋の嶺々
一心といふことあらば冬紅葉
目つむればこの身あかあか冬の鵲

そぞろ寒振子時計の止まりたる
貫ひたる柿三ついたく燭に映え
「ハピバースデイ」と老の合唱照紅葉
小春日の施設の午後をふとねまる
「ゆり籠の歌」のチャイムや冬夕焼
龍の玉黒着て恩師偲びけり
速達を呉るる青年息白し

紅葉かつ散る

清水裕子

紅葉かつ散る門灯のうす明り
赤松の幹のささくれ一茶の忌
一条の光に池の水澄めり
山茶花や何処からとなき人のこゑ
冬蜂の命の果てを草の上
憶ひをり森の家なる暖炉の灯
冬の夜の眠り促す曲を選ぶ